# 第1回日越友好高齢者介護セミナーを開催して

藤本　文朗

## 1．第一歩を踏み出した

2006年12月25、26、27日、ホーチミン市幼児師範学校で行われた第一回日越友好高齢者介護セミナーは約80名（日本側30名、ベトナム側50名。正式参加名簿は別記）の参加を得て第一歩をスタートした。両国代表の挨拶（T. T. N. Chuc校長、藤本文朗）に続き、日本側から日本の高齢者介護の現状と問題点について（実技を含む）5本のレポート、ベトナム側からはベトナムの高齢者介護の実態と問題点について4本（施設見学を含む）が報告され、ディスカッションも活発に行われた。最終日にはChuc校長、藤本文朗の総括が行われ、閉会した。

そして12月27日にベトナム側主催のレセプション、翌28日には日本側主催のレセプションが行われ、友好を深めた。

私はこの集会は、日越にとって初めてのもので、歴史的な意味を持つと思う。このセミナーを通して、高齢者介護について日越が多くのことを学びあい、そして第二回への展望も開けたと言えよう。このセミナーの成功を喜びたい。

## 2．参加者も多彩

参加者は本報告書に名簿があるが、付け加えると、

日本側

① 大阪健康福祉短期大学教職員13名、学生7名
② 障害者共同作業所職員2名
③ 大阪府下保健師
④ 保育園看護士
⑤ ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会現地（ツーズー平和村）特派員（西村久留美氏）
⑥ 東北福祉大学教員（江崎智里氏―通訳）

ベトナム側

① ホーチミン市幼児師範学校教員21名
② ホーチミン市行政関係者（教育訓練局）
③ オープン大学福祉関係研究者
④ 南部科学大学福祉関係研究者
⑤ ホーチミン市第三短期大学福祉関係研究者
⑥ ダーチェン障害児学校関係者（僧を含む）
⑦ 南部社会科学院研究者
⑧ ティーゲ高齢者センター職員
⑨ タンロック障害者・高齢者センター
⑩ 立命館大学大学院修了者
⑪ その他尼僧

第二回目には、日本側も他大学の研究者や施設現場の職員の参加が求められよう。

## 3．セミナーで“高齢者介護”を取り上げた意図は

私どもはこのテーマをなぜ選んだか分からず準備してきたが、開会の最初の挨拶でChuc校長がそれを明確に示してくれた。

① 「専門職としての高齢者介護を養成するという新しい分野の原点となり」
② 「目覚しい経済発展を遂げるドイモイ時代におけるベトナム社会のニーズに対応しうるものとなることを願っています」
③ 「これは、私たちベトナム人の美しい伝統文化にふさわしい、全人的な取り組みである」
④ 「昔からベトナムでは、子どもたちに、両親の教えを聞き、年老いた父と母を扶養するよう教育してきたのです」

つまり、ドイモイ時代の経済発展の中での社会的ニーズとしてA.高齢者介護職員の養成の必要性を認めると同時に、B.ベトナムの美しい伝統である家族介護、地域介護力の活性化を打ち出したい、ということである。

確かに、今のところ核家族化が進むといわれているホーチミン市でも、家族や地域の介護力があることは、我々のツーズー病院職員への聞き取り調査でも確認される。また、本書のホーチミン幼児師範学校のThanh先生の在宅介護の報告にも認められる。

しかし一方で、ドイモイ政策が進むなかで、これらの家族力、地位気力も崩れつつあることは、Tu尼

僧の報告でも明らかである。この点から、Chuc 校長も高齢者介護の社会化の必要性を認めているといえよう。

### 4．日越の共通の理解は

Chuc 校長のセミナーの企図でも明らかなように、基本的理解は日本と共通しているといえる。ただ、ベトナムの高齢者社会への進行はベトナム戦争の影響で（Cuong 氏の報告を参照）2010 年以後になるとのことである。

共通理解されたことを確認しておこう。

① 高齢者介護の社会化（ベトナムの場合、2010 年以降）
② 高齢者介護の専門職の養成
③ 高齢者介護の専門職の労働条件の劣悪（対話の中で明らかになった）

そして、高齢者介護の実践については、Thanh 先生の在宅介護の報告が、日越共通の理解のなかで感動を与えたといえよう。

日本側の報告では、小田先生の介護技術の実演はベトナム側によく理解され、次回も、との声が聞かれた。

### 5．日越の相違点

まず認めねばならないのは、Chuc 先生のいう高齢者介護のベトナムの美しい伝統が、今もホーチミン市でも残っていることである。「親の介護は子の義務」という常識が存在するような社会である（Thanh 先生の報告を参照)。そして、核家族も少ないことであり、地域の介護力が残っているというか、存在している。一方で、権利や人権、プライバシーという言葉は報告や討論でもベトナム側からは聞かれなかった。

全体としていえることは、ベトナムでは今のところ、高齢者介護が社会的問題となっていないといえよう。しかし関係者は、いずれ問題になることを感じているようである。

### 6．第二回目のセミナーに向けて

① 第一回目は日本側の報告は統計的、概論的になりすぎており、ベトナム側からはもっと日本の高齢者介護の実態を知りたい、ということであった。プライバシーの問題があるが、ビデオで紹介できれば、と思う。
② 具体的な問題としては、認知症やターミナルケアを取り上げていくことが求められよう。そのためにも施設関係者などの人々の参加発表が求められる。
③ 日本側はこの問題については進んでいるから教えてあげる、ということではなく、ともに学んでいくという姿勢が必要である。Chuc 先生のいうベトナムの高齢者に対しての“美しき伝統”についても日本としてどう把握するかが問われる。

とにもかくにも、第一歩を我々は進みだした。

### 7．さしずめ進めるべきこと

さしずめ進めることは、① Cuong 氏の報告で参考にしているベトナムの高齢者問題についての文献（とりわけ英語のもの）を探し読み、学習会を持ち、ベトナムの高齢者研究の到達点を知ることであろう。

②先にも少し触れたことであるが、昨年（2006 年）の 12 月 27 日の午後、ツーズー病院の職員で高齢者を抱えている人々への聞き取り調査を続けること。12 月 27 日の午後においては 3 ケース行ったが、共通して言えることは、A. 核家族ではなく 10 名以上の家族である、B. 高齢者介護の責任は末の息子（北部では長男）にある、C. 高齢者も家族の中で仕事や役割を持っている、D. 認知症のケースが一例あり、徘徊などあるが近所の人が介護してくれる、などである。

③そして、さらに時間が許されれば、ホーチミン市の寺院関係の無認可の高齢者施設の実態を調査してみては、と思う。

なお、Chuc 校長のいうベトナムの“美しき伝統”についての参考書として、ドーホン・コック (Do Hong Ngoc) 著、皆川一夫訳「ベトナム老人はなぜ元気なのか―東洋式老いの技法―」(2001 年、草思社) が挙げられる。

最後になりましたが、通訳の労をとっていただいた、江崎智里氏と事務局の chunh さん、田中智子氏にお礼を申し上げたい。